島崎藤村著「千曲川のスケッチ」岩波文庫、岩波書店 1927 年 10 月 10 日刊を読む

愛のしるし

飯山で手拭が愛のしるしに用いられるという話を聞いた。縁を切るという場合には手拭を裂くという。だからこの辺の近在の女は皆な手拭を大切にして、落して置くことを嫌うとか。

これは縁起が好いとか、悪いとかいう類の話に近い。でも優しい風俗だ。

P171

山に住む人々

１．**学問の普及ということはこの国の誇りとするものの一つだ**。多くの児童を収容する大校舎の建築物をこうした山間に望む景色は、ちょっと他の地方に見られない。左様いう建物は何かの折に公会堂の役に立てられる。小諸でも町費の大部分を傾けて、他の町に劣らないほどの大校舎を建築した。その高い玻璃窓は町の額のところに光って見える。

２．**こういう土地だから、良い教育家になろうと思う青年の多いのも不思議はない**。種々な家の事情からして遠く行かれないような学問好きな青年は、多く国にいて身を立てることを考える。毎年長野の師範学校で募集する生徒の数に比べて、それに応じようとする青年の数はかなり多い。私たちの学校にも、その準備のため一、二年在学する生徒がよくある。

３．**一体にこの山国では学者を尊重する気風がある**。小学校の教師でも、多の地方に比べると、比較的好い報酬を受けている。また、社会上の位置から言っても割合に尊敬を払われている。その点は都会の教育家などの比でない。新聞記者でも「先生」として立てられる。長野あたりから新聞記者を聘して講演を聞くなぞはここらでは珍しくない。何か一芸に長じたものと見れば、左様いう人から新知識を吸収しようとする。小諸辺のことで言って見ても、名士先生を歓迎する会は実に多い。あたかも昔の御関所のように、左様いう人たちの素通りを許さないという形だ。

４．**御蔭で私もここへ来てから種々な先生方の話を拝聴することが出来た**。故福澤諭吉氏も一度ここを通られて、何か土産話を置いて行かれたとか。その事は私は後で学校の校長から聞いた。朝鮮亡命の客でよく足を留めた人もある。旅の書家なぞが困って来れば、相応に旅費を持たせて立たせるという風だ。**概して、軍人も、新聞記者も、教育家も、美術家も、皆な同じように迎えらるる傾きがある**。

５．こうした熱心な何もかも同じように受入れようとする傾きは、一方に於いて一種重苦しい空気を形造っている。強いて言えば、**地方的単調**……そのためには全く気質を異にする人でも、同じような話しか出来ないようなところがある。

６．それから佐久(さく)あたりには殊(こと)に**消極的な勇気に**富んでいる人を見かける。ここには極(ご)くノンキな人もいるがまた非常に理屈ッぽい人もいる。

７．何故(なぜ)こう信州人は理屈ッぽいだろう、とはよく聞く話だが、一体に人の心が激しいからだと思う。槲(かしわ)の葉が北風に鳴るように、ちょっとしたことにも直(すぐ)に激し顫(ふる)えるような人がある。それにつけて思出すことは、私が小諸へ来たばかりの時、青年会を起そうという話が町の有志者の間にあった。一同光岳寺(こうがくじ)の広間に集った時は、盛んな議論が起った。私たちの学校のＩ先生なぞは、若い人たちを相手に薄暗くなるまでも火花を散らしたものだ。皆な草臥(くたび)れて、規則だけは出来たが、とうとうその青年会はお流れになってしまったことがあった。

８．一方に、**極(ご)く静かな心を持った人**と言えば、私たちの学校で植物科を受持っているＴ君なぞがその一人であろう。**ほんとに学者らしい、そして静かな心**だ。奈何(どん)な場合でも、私はＴ君の顔色の変ったのを見たことがない。小諸から少し離れた西原という村から出た人だ。Ｔ君の顔を見ると私は学校中で誰に逢うよりも安心する。

P180 ～ 182

＜コメント＞

私塾の教員として信州小諸で 6 年間を過ごした島村は、千曲川に望む地の人びとの暮らしや自然を心情豊かにスケッチした。珠玉のエッセイ。是非、御一読を。

― 2016 年 6 月 23 日（木）　林　明夫記―